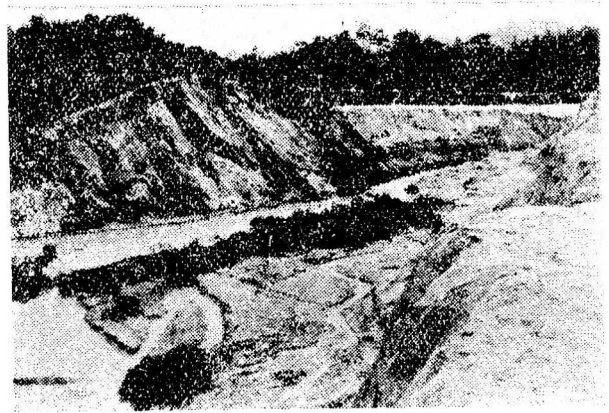


四、家棟川とダム

54

(一) 水害の思い出

祇王の多くの人々は、今もまだ忘れ去ることの出来ない思い出を持っている。ちょうど太平洋戦争の始まる六ヶ月まえの昭和十六年六月二十八日、近畿地方一帯は、連日の降り続いた雨でどの川も水量は増し、安全な水位はすでに越えていた。

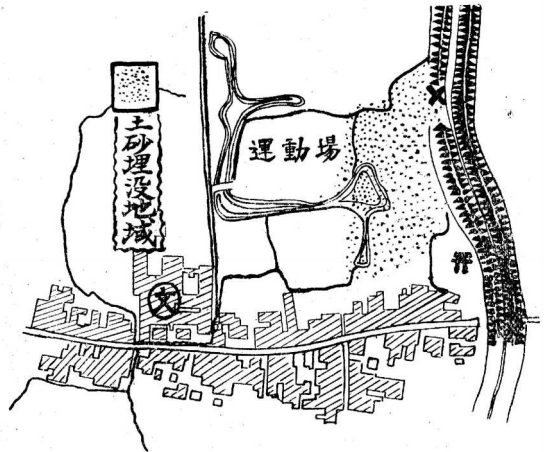


(運動場の先の決壊)

大きな川沿いの村や町では応急工事の材料を整え、一刻も早く雨のあがるのを待っていた。

55

祇王村でも込田附近はもちろん、川という川は皆あふれるばかりの水で、夜も岸を見守る人影が絶えなかった。大溝川でも濁水が堤防を越え田に流れかけた。村の人々はそこに土俵を積み重ねまた土等でふさいで補強した。空は相変わらず真っ黒な雲がただよっていた。午前十時頃村内の危険箇所巡視があった。その時家棟川だけは、第一堰堤があったため、たいしたこともなく、鉄道のトンネル附近をじみじみと砂に浸み込みながら、ゆっくりと流れている程度であった。



(家棟川決壊場図 その一)

決潰箇所を一番に発見した人
福谷介蔵氏
堤防を巡視中松の根を洗う細い流れを発見、直ちに応急策をして役場に連絡した。後に県知事より表彰された。

昼食が終った頃、運動場の前方にある直径一メートルほどの松の木が、にわかに、ぐらぐらっとゆれ出した。とみる間にその木は根ごとすべるように濁流にのまれていった。黄色く濁った泥水は怪物のようにおどろき出てきた。木は倒され、堤はえぐられて、大きな穴があいていく。植付けられてまだ日も浅い田の面は、一瞬にして大川となり、土砂まじりの水は大きく波打って田畑をなめていく。

56

勢あまった水は、学校にも、永原の家々にも浸入し、街道には砂まじりの水が腰までつき、交通も断たれてしまった。ちょうどベニスの町のようなのである。

十二時過ぎに決壊

サイレンを聞いて、かけつけた警防団の人々や、縁故の人々は、そ

れぞれ家具の運搬を手伝い、学校でも先生たちの手で重要な書類、その他大切な物は一応二階へ運ばれた。

濁流は、置きのこされた家具、タライ、空だる、はき物から台八車までも押し流がした。堤防下の堀は砂で埋まり、まるのみにされた二十反余の田畑は、さながら新しく出来た川のようにであった。

この怖ろしい水は家の間を通過して、朝鮮人街道から江部、錦織寺道へと流れた。その為に江部では家が一軒流失してしまった。縁の下に流された砂が十数センチもたまったという家もある。

この間の騒動は、実に三十分間という僅かばかりの間に起った出来事であったが、村の人々は、水の勢に驚き恐れ、数時間も続いたように思ったが、やっと水の少なくなったのを見て、生き返ったように一息ついたのであった。

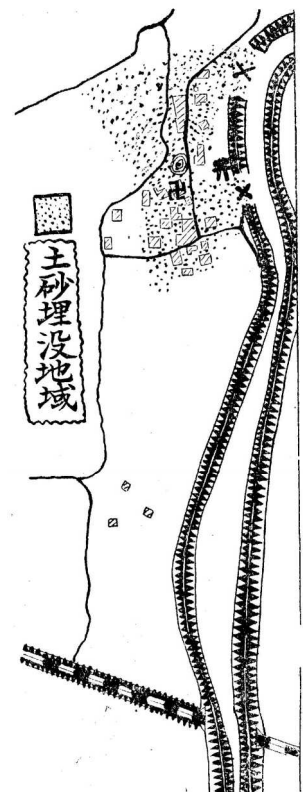
一方、甲冑波ではこの決潰によってすぐに反対側の堤防の決潰するのを防ぐ為に、すのこ、竹みざら、堤防の松の木等でながしをかけた。おかげで大事に至らなかったが、それでもいくらか堤防の砂はけずられた。今も両側の堤が低いのはその為である。

人々の安心も束の間で、それから二時間後の午後三時頃、悪魔のような激流は、再び上永原部落の真上を決潰させた。堤防の内側からむしばむように砂をかき流した水は、小さな穴から「ぼこぼこ」とふき出してきた。穴は見る見るうちに大きくなった。わらをつめたり、砂で押えたりしたが、すでに後のまつりであった。

けたたましくなりひびく半鐘の音、持てるだけの家財道具をかかえて雨の中へ飛び出す人々で部落は悲痛な光景となったのである。

土砂をまじえた水が高く波打った。とみる間に、堤防を一思いになめつくし、屋根の上から家の中めがけて流れ込み、障子も戸も押し倒し、押入れの中、戸棚の中へと容赦なく浸入し、着物もふとんもみなその下になってしまった。

なおも決潰口は拡がり次第に上の方へ上の方へと堤はかきくずされた。山の神の附近の柴だらけの堤防のみ一部残して又百メートル上流の曲ったところを切ってしまった。こうして上永原は九戸のうち二戸を残して全部土砂に埋まった。屋根だけが淋しく砂の上に浮かんでいた。この水の為に鉄道も土砂流失で不通となり附近一帯はにわかに海となって、野菜や鍋釜までが思わぬ水に隣村の高木方面まで旅をした。



(家棟川決潰地域図 その二)

ながし
水によって岸の砂
が流れるのを防ぐた
めにあてがうもの。

57

字の人に危険を知ら
せた人 北原蔵次氏

58

山の神
毎年部落で祭だけ
をしているが、は
っきりした社名の
ないほこら

学校も毎日砂かきの奉仕に出て村人に協力した。

こうして山上の水が出つくすとあとの川原は何もなかったかのように水の流れが止まった。

家々では砂取り、床下のニコかき、大掃除と毎日始末が続けられ、とりわけ上永原は被害が大きかっただけ

に復旧作業も涙ぐましく且つ長日時を要した。砂をかき出す家、砂の中から床をはずして掘り上げる家もあった。砂に埋ったものは何一つ役に立たず捨て去られてしまった。

59 食事は毎日共同炊事で家族ごとに配給された。近い所はもちろん遠い所からも野菜や食器、着物など温かい見舞品がつぎつぎと送られて来た。

こうして約一ヶ月半、人々は部落復興の為必死の努力を続け、ようやく住みつけるようになった。田地の土砂取りも又大変なものであった。決潰箇所に近いところでは田の上に二メートル以上もかぶり、この砂を出すのにも何日も日数をかけて、やっと田の植え直せるところもできた。砂の出せない田は畑に変えられた。

しかしこの大被害も割合に早く復興した。これも村の人々の努力と共に他の町村の援助と協力のおかげである。奉仕団の中には遠く滋賀郡から来た人もあり、暖い友情を受けたことも忘れられない。

被害状況

埋没赤屋	七戸
流失家屋	一戸
浸水家屋	一五六戸
田畑の埋没	七三反
冠水田畑	二六〇〇余反

(二) 砂を流す家棟川

家棟川という名前のおこりは、川床が屋根の棟より高いところを流れている川ということから、この名前がつけられたものであろう。このような川は滋賀県を除いては余り他にみることのできない川であって、めずらしいものである。

60 この川は、辻町の堰堤から村の中心を通過して富波甲の込田に流れ、(この間、約三・五キロメートル)西祇王井川と合流して童子川となり、約五・五キロメートル下って、びわ湖にそそいでいる。源は石切



(土砂に埋った上永原の家屋)

山と、谷の間に作られた第二堰堤附近よりその上の土場谷、揚梅谷、深谷、石原谷、針木谷さらにその奥の赤谷の第一堰堤、平子谷、城山、蒲生郡の薬師山、甲賀郡の菩提寺附近の谷川より発している。

今この附近一帯は美しい小松原続きとなっている。白い花崗岩の風化した砂原をぬって流れる清い谷川あざやかな松の緑をながめながらハイキングするのもよいものである。

ところがこの美しい松原も、今より七、八十年以前は、何一つ生えていない沙漠のような砂山であった。この沙漠に一たび豪雨が見舞えば忽ち土砂は流れて下へ下へとおし流され、長い年月の間に川底は高くなってきた。こうして川床が高くなったために、非常



(屋根よりも高くなった家棟川 国道八号のトンネルより)

61 な災害をたびたび村民に与えた。昭和十六年のほか明治三年九月三日にも上屋の篠原神社裏の堤防を決潰させ、社は流失し、田も砂をかぶった。今では畑となっている。

このような水害を防ぐために、家棟川では毎年川床を掘ってこれを下げ、又堤防を高くしなければならない。家棟に接した部落では年中行事として毎年坪取りを行なって川床を下げ、その砂を積み上げて護岸工事を施し、堤防を守っていた。

又甲富波では大水になると砂が流されて来て、川をうめ水の流れを悪くするので、水の中に入って砂のかき流し作業をしたということである。

こうして家棟の水は、約三メートルの落差で童子川に流れ込むが砂まで流し込むと童子川の川床が高くなり、排水が悪くなる。そこで明治の中期、込田附近の川原の中に砂を止めるための砂止め堤防を築いた。こうして人々は、毎年砂の流れるのを防ぐことに力をつくしたのである。

それにもかかわらず水は、毎年ねばりけのない砂を流したので、遂に家棟川という天井川を作ったのである。

昔の堤防は今程に高くなく、川向うの部落の屋根が見られたということである。又大名行列の際にも大名の毛槍の先が堤防越しに見られたということも聞いている。このようなことから昔はもつと低い川であったということが想像できると思う。

62

(三) 砂 防 工 事

1 みどりのお山

汽車のトンネルの上へ行くと、堤防の南方に石が並べられているのを見ることができる。トンネルのできた時(明治二十二年に竣工)この石は川床から三段(約一メートル)であったのが、年々おし流されて来る土砂のため、現在では一段(約三〇センチ)しかみられない。これによって土砂が年々流されていたことがうかがえる。

砂防工事
初代村長岩田重吉
氏は特にこの事業に
ついて尽力された。

御即位大典記念学林
(平子谷の学林)
大正天皇の御即位
を記念して、大正四十
年四月一日より五十
年間の契約(五十年
を過ぎたときは契約
を更新すること(三
段二上)で辻町の
神社より、三段二
畝十二歩(約三ア
ール)の地を借り入
れた。地代は伐採し
た樹木の1/10を払う
ことになっている。

63

水源地帯の山から水の力によって流される砂の量は大変大きなものである。家棟川だけでも一年間に流れてくる砂の量は、トラックに積んで約八百台分という大きな数になる。このままにしておけば、いつかは家棟川は大洪水をおこし、水と土砂によって地味がよく肥えた田や畑、川に近い家々は大きな被害をこうむるだろう。

そこで何とかしてこの砂の流れない工夫はないかと考える人も昔から多かった。明治になってからは植林についてのよい研究がなされて、この山にも行なわれるようになった。

祇王村では明治十六年より永久を期し国費による砂防工事が始められることになった。

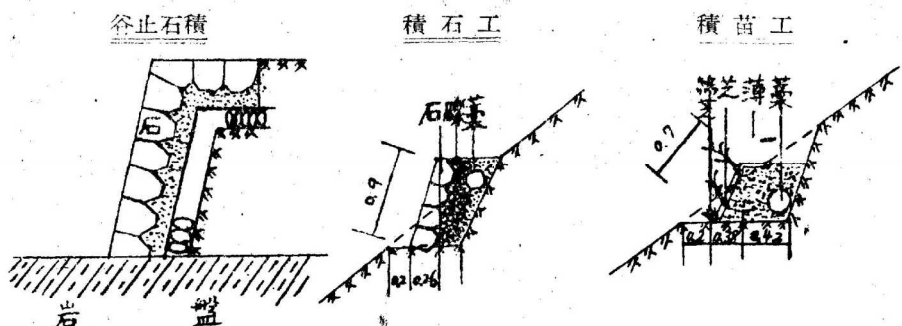
家棟川の水源地帯は特にやせた砂地で草も育たないために、長い間禿山となっていた。そのために土砂はくずれ水に流されて下流へ運ばれやすいので、これを防ぐために砂防工事が始まったのである。砂防工事をするのには植林すればよいのであるが、木が育たない。そこで砂地にでも育つ、ハゲシバリを植えて地力をつけ、そこへまつ、すぎを植えた。その後年々にハゲシバリは成長して、今ではよく茂り年月と共に砂山も緑色にぬりかえられてきた。このような植林を行ったため、今では土砂の流失も少くなり、大雨の時には水を貯え、早魃の時に少しずつ水をはき出す自然の大きなダムともなっている。学校でも大正初年に平子谷へ松苗を植えて学林とした。その後四十年経った今では立派な木になり、しっかりと大地に根をおろしている。

尚昭和二十七年三月には、小学校五、六年と中学生に依って補植を行い、百年後の平子谷を想像して帰ってきた。こうした努力の結果今では禿山をみることができなくなった。



(平子谷の学林)

2 沈砂池としての堰堤



(山腹工事のいろいろ)

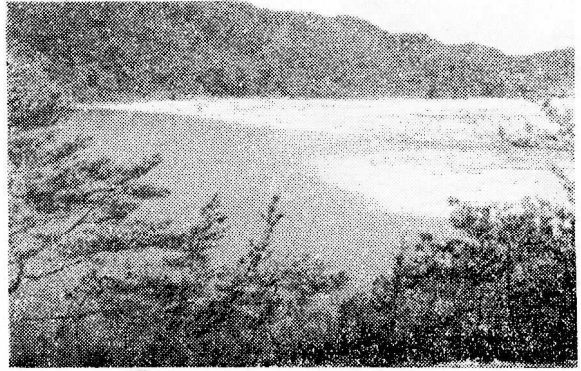
64

降雨量が多いと砂地はくすれ易く、折角の植林も根こそぎにされるので、明治二十八年、急流に石垣の堰堤を作った。さいわい附近に花

一尺 = 〇・三〇三
メートル
一間 = 一・八
メートル

崗岩が多くあるために、遠くより運ぶ苦労もなくこれを使用することができた。この工事は谷あいには石を約二メートル程積み重ねて砂止めの石垣を築くのである。ここで水は一度たまり、砂だけを沈めて流れていく。水しぶきをあげて気持ちよく落ちていくこの水、何か遠い昔を物語っているようである。

この砂止めが高い所から段を重ねて、ゆるやかな流れをつくっている。それでも水はどこからともなく砂を持ってくる。そこで明治三十八年赤谷に高さ十八尺、延長七十四間のダムが作られた。まん



(沈砂池として作られた第一堰堤)

まんとたたえられた水は、青く澄みきった空と、緑の山はだをその面に映している。夏などは、ここにキャンプを張って山の一夜を明かすのもよいものであろう。清い水で顔を洗い、谷川の水で朝食の準備をし朝日を拝むのも、亦格別である。

砂防工事ができたあとの山地を歩く人は、水こけの生えた岩の間に松の根から、一滴一滴落ちてたまる水たまりをみかけるであろう。

65 疲れ切って岩に腰をおろし、手ですくって飲む水の味、すがすがしい谷間風、しずかに昔の山上^{やまがみ}を思い浮かべてみる。日照りが続いたなどとは思われない豊富な地下水、これがいくつも集ってできた貯水池、今年もこの水によって養われる水田の数は大きなものである。自然の力の偉大さ、これを利用する人の力も亦大きなものである。

(四) 新家棟川と第二堰堤の工事

1 家棟川の改修

曲がりくねって下ほど川幅のせまい家棟川は年々多量の土砂を下流に流し、たびたび被害を与えた。村の人々にとってはちょうど導火線に火のついたダイナマイトを持たされているようであった。そのため村人はどうかしてこの川を断ち切って水害を防ぐ方法はないものかと考えていた。しかしこの仕事を村でするということはたいへんなことである。改修するとなれば土地の問題、労務の問題などで一村の経済ではとうていやっていけなかった。

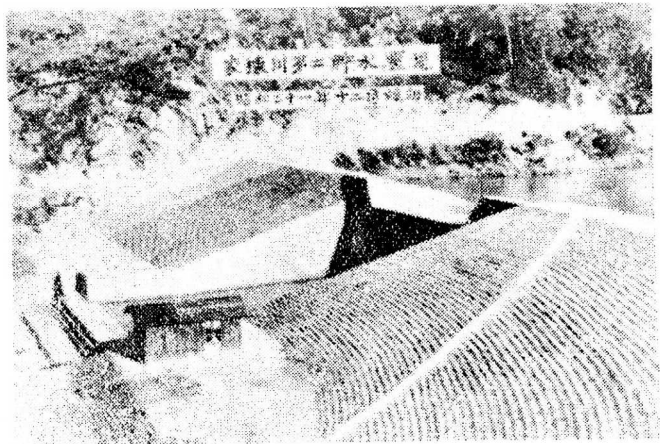
太平洋戦争が始まる前の年頃より、国内では食糧の自給自足体勢が強く要望された。祇王村でも危険な家棟川を改修することによって食糧を増産することが考えられ、当時の村長山本喜一氏は度々県に具申された。ところ、が「不孝が転じて幸」となったのか、六月に家

66 祇王村の区域内を流れる家棟川、童子川は延長四・五キロメートルであったが、改修によって三・五キロメートルに短縮された。

棟川が決潰し、多くの犠牲を出した。そのためにかえって大々的な改修の必要性が認められて、県営工事として改修されることになった。新しい川の位置は定められ測量の杭がうたれて、翌年の九月五日、学校の講堂に於て起工式が行われた。希望と喜びに満ちた村民は翌日より工事に取りかかることになった。地下タビに巻キャハン姿でモッコを担ぐ奉仕隊、その間に学生帽姿も見受けられた。こうして新しい堤防は一日一日延びていった。そして昔からの尾根より高い家棟川は不要となり老後の余命を過ごしている。

2 山上の堰堤

堰堤をあふれ出た水は家棟川決潰の大きな犯人であった。明治二十六年にできたこの堰堤もいつの間にやら土砂がたまり、沈砂池としては少し不十分であった。排水のよい家棟川と同時に砂を



(新しくできた第二堰堤)

よく沈める堰堤を作らなくてはならない。昭和十八年九月二十日家棟川の右岸山桃谷と左岸石切山の地峡に堰堤建設が始められた。工事は母岩まで川原を振り下げて「はがね」を打ち込むのである。この「はがね」は普通コンクリートですののだが戦時中はセメントの入手が困難であったために、第一堰堤と同じようにお池の粘土が利用された。毎日車に積んで山道を運ぶのはなみたいいていことではない。

こうして厚さ一メートル、高さ約一七メートル、延長二〇メートルの「はがね」ができ、これを中心にして土手が築かれた。水は徐々に貯えられて谷を沈め、切株を沈めて大きな人造湖を作っていった。

3 山上井と田用水

第二堰堤の樋から流れ出た水は、砂川を走る一条のコンクリートでできた溝を約六百メートル。ここまで来た水は約二・五メートル四方の水溜に入る。ここから二本の土管に同じように分かれて東側は上屋、西側は辻町、富波甲、乙と四つの字の水源となる。この水源のことを山上井といっている。夏のやけつくような暑い日照の日にも水がきれずに流れてくる。堰堤の水が無くなるまで毎日同じように流れてくる。

この分水塔のなかった頃はどんなであったろうか。日照りが続くと両岸の字々では地下水を取るために毎日井登りをした。少しでも多く

山上川がうるおす田
地は、
東側 上屋
約一千段
西側 辻町
甲富波
乙富波
約一千段
といわれている。

水が入るように川の瀬
が問題を起したことも
ある。又雨乞い祭をし
たこともある。幸い雨
が降っても禿山はすぐ
かわいてしまってもと
どうりの旱魃となっ
た。そして次の日から
は又雨を待たねばなら
なかった。

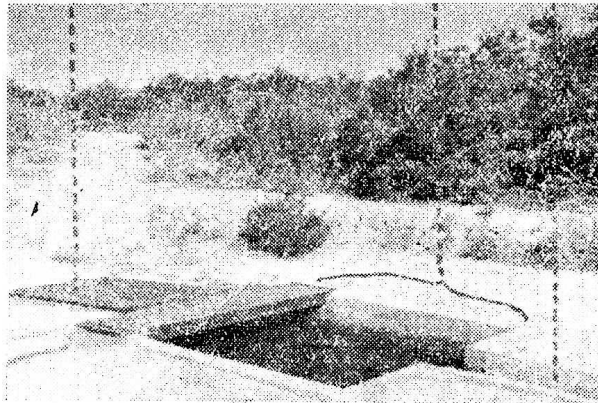
昭和二十一年に堰堤
ができてから付随工事
として昭和二十四年の
春、分水塔が完成され、
水の調節係もきめられ

て、どんな年にも旱魃の心配がなくなった。村人も今では安心して農
耕にはげむことができるようになった。

ここから東側は上屋
辻町へ流れていく

水溜
・メートル四方

家棟川よりの
コンクリート製の水路



(上屋、富波甲、乙、辻町への田の水を分けるしかけ)